医療・介護の経営に役立つ臨床検査

第6回目

医師の働き方改革と検査室のタスクシフト
―臨床検査技師の手術支援による戦略的人材活用―

東邦大学医療センター大森病院　杉山邦男

はじめに

病院経営を取り巻く環境は、診療報酬改定の影響、医療安全に対する社会的要請の高度化、さらに医師・看護師を中心とした人材不足などにより、年々厳しさを増しています。このような状況下で、医療の質を維持・向上させながら安定した経営を実現するためには、新たな設備投資や人員増強に依存するのではなく、既存の人的資源と専門性を最大限に生かした戦略的な人材活用が不可欠です。その具体策の一つとして、臨床検査技師が担う「術中神経モニタリング」が注目されています。

術中神経モニタリングは、脳・脊椎脊髄手術をはじめとする神経系手術において、神経損傷の兆候をリアルタイムに検知し、外科医へ即時にフィードバックすることで、術後神経障害の低減を目的とする手術支援技術です。術中神経モニタリングは、神経機能を保護しながら病変部位の切除を最大化できる点で、医療安全と手術成績の両立に大きく寄与します。

臨床検査技師は、脳波、誘発電位、筋電図などの神経生理学的検査に精通しており、術中神経モニタリングにおいて神経機能の微細な変化を的確に評価する専門性を有しています。こうした専門職による関与は、医療事故対応に伴うコストや社会的信用低下のリスクを抑制し、医療の質向上を通じて病院経営の安定化に直結します。さらに、臨床検査技師が術中神経モニタリングを担うことで、医師の業務負担軽減や手術の効率化が

すぎやま・くにお●1994年東京電子専門学校臨床検査学科卒業、2022年東邦大学大学院医学研究科博士課程（高次機能制御系脳神経外科学専攻）修了、2024年東邦大学医療センター大森病院　臨床生理機能検査部技師長補佐